

喜怒哀楽



DECEMBER-JANUARY

12-1

Vol.89

「喜怒哀楽」は、文芸を楽しむ方々の活力の源を目指し(株)ミューズ・コーポレーション喜怒哀楽書房が隔月発行している情報誌です。

詠み人応援マガジン・詩歌俳壇ニュース

CONTENTS

笑顔礼讃西東

中原道夫句碑建立10周年記念

とねりこ句会 (新潟県・新潟市) 2~3

岡田恵子 (神奈川県・横須賀市) 4

詠み人スクランブル

《冬の装い、あなたのおしゃれのポイントは?》10~11

新潟ぶらり／県立鳥屋野潟公園 12

詠み人の「リレーエッセイ」 歌人 雪舟えま 16

「なつかしい遊び・玩具」シリーズの5回目。コマは独楽。正月に遊ぶ日本だけの玩具と思いがちですが、最古のコマはエジプトで発掘され、紀元前数千年の大昔から世界中の人々に愛され続けています。江戸時代後期になると、日本各地で土地に根ざしたコマが生まれ、日本は「コマの宝庫」と評されるように。縁起よくクルクルと長く、元気に周り続けられますように!

温古知新 ④3

「菜根譚」15

前回は、自己を律し、他人を思いやる事の大切さなどを学びました。今回は56項からご紹介します。

奢る者は富みて而も足らず。何ぞ儉なる者の貧しきに而も余りあるを如かん。能ある者は、労して而も怨みに府まる。何ぞ拙き者の逸にして而も真を全うするに如かん。

(贅沢な者は、いくら豊かでも満足しない。それでも、いくら貧乏でも余裕がある者はいる。また才能のある者は、いくら努力しても恨みがかう。それでも、いくら粗忽でも本質に生きる者はいる。)

現状を受け入れ、無理に求めすぎないように、ということでしょうか。

書を読み、聖賢を見ざれば、鉛槧の備たり。官に居りて子民を愛せざれば、衣冠の盗たり。学を講じて、躬行を尚へざれば、口頭の禅たり。業を立てて種徳を思わざれば、眼前の花たり。

(本を読んでも内容の如何を理解しなければ、

ただ読書をし文章を書くだけの者だ。役人であつても国民を愛さなければ、ただの給料泥棒である。禅学を教へても実行しなければ、ただの口先だけの知識に過ぎない。起業して利益を上げてても社会貢献しなければ、ただの目の前の花を愛でるに過ぎない。)

うわべを知るだけでなく、真に理解し実行しなければ意味がない、ということ。中身が大事。人心に一部の真なる文章あり、都てに封錮し了る。一部の真なる鼓吹あり、都て妖歌艶舞に湮没し了る。学ぶ者は、須く外物を掃除して、直ちに本来を覓むれば、纔かに真の受用有るべし。

(人間には生れながらにして真理が書かれた本を心の中に持つているが、不完全な書物に惑わされている。また、真理を奏でている音があるにも関わらず、怪しげな歌や踊りに囚われている。周囲の邪魔なものを一掃し、本質を探求すれば、心の中に最初から全であるので、直ぐにそれを享受できるはずだ。)

自分の心を研ぎ澄ませれば、自ずと正しいものや心理が見抜けるはず!

何物にも惑わされず、静かに自分を見つめることができるようになれば、穏やかに過ごせるのかもしれない。そんな心境に達したいものです。
(古川久美子)

笑顔礼讃西東

物。往時の隙間風が吹き込んで、平成の人間どもをちよつと驚かせてやるう、という感じの「笑ふ」なんでしょうね。

◎朝霧や無雑の景を切取れり 痴龍
 □朝霧がスクリーンのように閉ざして、夾雑な景を見せないように隠してしまつたということ。

◎霜降や燕三条鉄曇 竜才
 □今日10月23日は二十四節気の一つ霜降。東京からここに来るには、洋食器等で知られている金物の街「燕三条駅」で降りる。それを一ひねりして、鉛色の空、ドンピシャの挨拶句。

◎稽田に肥立ちの良否ありにけり 貞利
 □稲刈りのあと、知らない人は青々とした田んぼを見て「また植えたんですか」と聞か、あれは二番穂。生み終わつた、つまり刈つたあと、何となく元気がない伸びていない肥立ちの悪い田んぼと肥立ちのいい田んぼがあるということ。

◆当季雑詠
 憎むごと 榎植の歪み切り分けり 淳男
 □かりんとマルメロはおなじバラ科だが似て非なるもの。榎植は非常に硬くて切るのに難渋することから、憎むという措辞がでた。

気がつけば熱の出てる曼殊沙華 則男
 □曼殊沙華がかたまつて咲くと、気づかなかつたが、切磋琢磨して地熱を吸い上げて熱を発しているのではなからうかというところ。じゃあ気づかなかつたらどうするんだ、ということになる(笑)。「気がつけば」と同様に「振り向けば」も、上五によく使われるが、「気を付けて」使つた方がいい。



▲時価〇円!? 価値ある色紙を手にする皆様

◎鷹匠の招餌唾へて翻る 竜才
 □鷹匠が持つている餌をめぐけて若鷹が翻つて戻り、よしよしという鷹と鷹匠の関係を詠み、特別なことを切り取つているわけではないが、映像がダイナミック。

雁鳴くや地図の折目の裂けゆきて 則男
 □「雁鳴くや」ではなく、「雁の声」としつかり名詞で書き始めて、地図の折り目の裂けゆきて、の「ゆく」という言葉で「雁がゆく」にひっかけられないものかと考えていた。

◎蓑虫の風雅に遊ぶ人も無し 年樹
 □悠々自適に枝からぶら下がつてぶらぶらと遊ぶというのが風雅の極致。だが今は、蓑虫のような生活に浸るような人もおらず、どことなくみんなせちがらくなつたということ。

人はみな自分史抱き鯛雲 亜真李
 □壮大なスペクタクルなのはわからぬが、頭上には鯛雲、来し方を目

追つているのか。それぞれにそれぞれの自分史を抱いて、それがずっと先まで回り込んでいくよう。

◎人類の絶えし平鷲鳥渡る 沙羅
 □この世から人類がいなくなつても鳥には関係ない。むしろのうのうと渡っていくのではなからうか、鳥の国ができていそうである。

歴代を婆の手によるつるし柿 恵美子
 □いまだに婆が健在なんですね。何でもする婆だと、たいてい何もしない子ができ、その何もしない母親の子は反面教師でいろいろと仕事をする。死んでから「つるし柿ってどうやって作るの?」とお隣りに聞きに行く「あんな婆さんから聞かなかつたんけ」といった様子か。

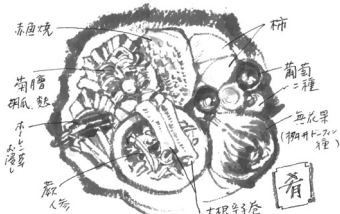
蜻蛉や研がぬ鎌より錆びてゆく 博夫
 □「より」ではなく「から」の方がいいでしょう。使っていない鎌ほど錆びるの



▲会員の旦那様(杜フォート)撮影、家庭的でいい感じ!



▼中原主宰の手にかかるとうなる



が早い、というニエアンズだともう少し書き方がかわつてくる。

◎理髪店の鏡に話す運動会 寿一
 □田舎だと運動会だなんていうと、散髪をしてきれいにしてから行つたり、店も7時頃から開いたりする。こちら側に店主がいて、いつものお客が「うちの孫が今日は徒競走に出るんだ」としゃべつている。こじんまりした村の理髪店、微笑ましい句。

◎羽根裏に夕焼隠し帰る朱鷺 みかん
 □何も夕焼を隠し帰らなくてもいいのではないか。ケージの中に住んでいる朱鷺の染まつた感じは、隠し持っているほうがいい。このままでももちろんいいが、隠し持っているから朱鷺はほの赤いとしたのだから、その方がメルヘン。

★句会後は、集合写真を撮つて祝賀会。地元の人が心を込めて作つた土地の味はどれも優しく懐かしい。囲炉裏のあつた茅葺の家に見守られ、互いに詠い、承認しあい、杯を重ねながら馴染んでゆく。同人会長田口さんの祝辞「とねりこ句会のもとまりにはいつも感心している」の言葉どおり、雄大な自然の懐也会も句碑も育まれていく。(木戸敦子)

岡田恵子様

(神奈川県・横須賀市)

句集『緑の時間』

11月11日(金)、本年11月に『オレンジの風』『黄色い風景』『マリンドルブルの椅子』に続く第4句集『緑の時間』を上梓された岡田恵子さんにお話をお聞きしました。

Q 前作から5年後の出版ですね

たまたま2作目が第一句集から5年後だったので、5年毎に句集をまとめてみようと思った。元来が怠け者。物事はすべて流れていくから、いつかしようと思っている間に死んでいくんじゃないかって。自分を律する意味でもどこかで区切りをつけようと思った。

Q 俳句との出会いは?

娘が小学校に入学するころ、近所で習い始めた。当時指導にあたっていたのが所属する「山河」の故小倉緑村代表。その自由闊達な俳句に出会い「俳句は一行詩、あなたの思ったことを詠めばいい」の言葉に後押しされ、今日に至っている。最近、さすがにそれだけではない



▲10年経ったら新しいことを。数年前にはフラダンスを始めたという岡田さん

けないことがわかってきたけど(笑)。

Q ご出身は四国ですよ

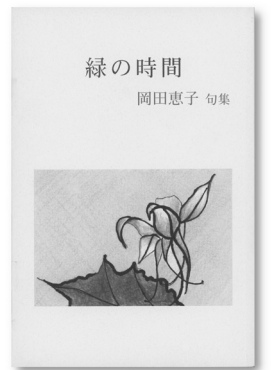
香川の田舎で育った。大学に行くつもりはなく高校を出たら働こうと思っていた。高校が学びの最後と思い、自分なりに勉強と部活(バレーボール)に没頭した。試しに受けた大学に合格したこともあり、結局東京の大学へ。それからはカルチャーショックの毎日。友人との会話一つとっても、その内容や文化は異次元だった。でも好奇心は旺盛で、卒業後はアメリカに行きたかった。一度地元に戻って就職し、お金を貯めながら英語の勉強を続けていた。アメリカで勉強をしたい若者を募っている団体に応募し、ある日「明日アメリカに行くから」と親に告げて旅立った。

Q 明日ですか(笑)

だって、言ったら反対されるのわかっていただけから。それでも父は岡山まで送ってくれた。オレゴン大学やホームステイで1ヵ月過ごし、一旦は帰国するが東京で働くつもりだったので、友人の家に転がり込み実家とは音信不通。今考えれば不良よね(笑)。その後、お風呂もない小さなアパートに引っ越した。ある時、突然父がアパートに引っ越した。場所は地元が一番の親友だけに伝えていたが、どうやら彼女に聞いたらしい。遊び歩いているわけではなく、昼間働き、夜は学校に通うという生活を見て許してくれたのでしょうか。見るに見かねたのか、最後は新しい布団と玄関の鍵をもう一つつけて帰っていった。

Q 親ってありがたいですね

ただ、その時「知人に頼まれた男性に会ってほしい」と言われ、その男性と



▲『緑の時間』メリハリのある並べ方にしたという300句を収録

同じ誕生日だったこともあり承諾した。それが今の夫! 当時、裸電球に机一だけの何もない部屋に住んでいた。夫はよく娘に「あの時ママを拾ってあげたんだ」と話しています。

Q ヨガを教えていらつしやいますね

ヨガは、地元で働きながら通った英会話学校の友達に紹介された。アメリカ行きを模索している時、やりたいことに対する自分の実力がないうちも分かっていて内心忸怩たるものがあった。そんな時に出会ったヨガは、心身ともに私を開放してくれた。約40年続け、小規模だが今は6ヶ所で教えている。日本にヨガを伝えたのは空海。故郷の四国は空海が生まれ修行した地ということもあり、ここ数年は1年に1回のペースで遍路歩きを続けている。

元々旅は好きだから旅吟は多く、今回の句集には四国、芭蕉足跡の地、左渡や隠岐、中欧で詠んだ句も入っている。一度旅に出てみると、自然や土地の人々との出会いが楽しく、歴史上の時代にタイムスリップしてやみつきに。半年位前から、家族には内緒で予定を立て、前日玄関にリュックサックを置き、突如として「明日行つてきます」と。

Q 得意ですね、その明日パターン!

だつていろいろ聞かれるのいやだもの

(笑)。自由に旅をしたいから。わがままこの上ないですね。基本は一人旅。でも今は「まさか自分がお遍路歩きをするとは」という退職した夫とともに私はオレンジ、夫は紺色の輪袈裟を首にかけて歩いている。ようやく半分を終え、まだ数年かかるが楽しみ。

Q これからは?

ヨガ的には「今を生きる」という精神がある。与えられた遺産や環境、出会いに寄り添って今を生きる。あとは自分が必要とされていること、少しは役立つことのできるだけ時間を使って生きていきたいと思っています。

『緑の時間』より三句

日本の祈りの形青田風

告白の締切り日です冬紅葉

大甕の底賑わえり夜の雪

★句集の「あとがき」を書かれた安西篤さんの岡田さん評は「蜜柑味の清少納言」。「知的でキビキビした感性は清少納言そのものだが、決してクールな固さではなく、すこし日向くさい親しみも感じられる」というもので、まさしくその見立て通り。5年前の句集をお手伝いすることになった時「じゃあ23日に新潟に行きますね」と、実にフットワーク軽く当社を訪ね、その場で表紙等も即決し、佐渡に渡つていかれた。今年、東京駅でお会いした際も「せつかく近くまで来たし行ける時は」と別れ際、原発反対デモの国会へと向かわれた。心身はつながっている。岡田さんの小柄でしなやかな体躯と精神もしっかりとつながっていた。(木戸敦子)

投稿作品



※ 誌面の都合上、300作品を超える投稿があった場合、掲載はお一人さま1作品、先着300名様までとさせていただきます。今回の投稿作品数は、262でした。
 ※ しめきり2017年1月16日(月)まで
 ※ 作品は原稿どおりに掲載しております。

短歌

- 1 愛あふれ楽譜に写すハ長調平凡家庭 つくる幸せ 松田重信(埼玉県)
- 2 意のままに文字すら書けぬ身となる もすべての核のノールとわれ詠む 黒澤正行(福島県)
- 3 空を描くポストカードの花の名は花観る故か覚えられずに 早坂絃司(北海道)
- 4 久しぶり子の泣き声に子守唄娘親子の泊りし夜半に 北澤実夫(東京都)
- 5 早朝に化粧ととのえにつこりと鏡の我に「若いね」と云う 峯岸信子(東京都)
- 6 「年重ね小さきケーキに夢託す」義姉の俳句まことすばらし 今井忠一(埼玉県)
- 7 銘菓提げて鎌倉彫りの店探す舗道吹く風すでに秋いろ 土屋喜雄(山梨県)
- 8 野のふかきあたりに捨つる花器ゆらゆらのぼる晩秋のひかり 北岡 晃(兵庫県)
- 9 三十年町案内人つづけしに背骨骨折 無理となりたる 高須 孝(愛知県)

- 10 心とは柔らかきもの止めようよ心が折れたなんて言い方 小林七重(新潟県)
- 11 一斉に右に靡びいたススキ穂の力脱く技学び生きたい 濱崎祥子(鹿児島県)
- 12 原発の再稼働ありきの政策にNOの民意のいかに重きか 山田良男(埼玉県)
- 13 夜泣きする吾子と守りするわれがいて眠れぬつらさ分け合っている 寒川靖子(香川県)
- 14 コンサートの拍手のようなざわめきが つよかわアルビのたたかいに寄す 安部 哲(新潟県)
- 15 ぐねぐねと左右の脚は振り出され競歩選手は一団で来る 桑原謙一(群馬県)
- 16 臨月の娘と過ごす晩秋のブランコ揺れて笑みがこぼれる 合田浩子(茨城県)
- 17 白鳥の飛来のニュースききながら家のまわりの櫓田に立つ 田中豊恵(新潟県)
- 18 笑みたえぬ新しき年祈りつつ犬介護しては愛おしき日々 大橋絵代(千葉県)
- 19 東京都でもあの始末自治体の津々浦々は如何にあるかと 濱田イサオ(福岡県)
- 20 よそおいて茶会に集う華やぎは秋のみりと健康祝う 高橋登志子(新潟県)
- 21 納屋直し母子四人小さき家疎開の日日の今は懐かし 関原幸子(東京都)
- 22 「君の名は。」に辿る月日はほろ苦く共に老いたり目の前の君 小川 暘(大阪府)

- 23 江ノ電で鎌倉までとゆれるかな大仏見れば心落着く 五味田幸夫(神奈川県)
- 24 ほうずきと遊ぶ楽しみ子供らへ吹いて音だす口の中から 大鳥居牧子(東京都)
- 25 老いの字は禁句と決めて持つ筆に賀状の文字の勢いの無さ 坂元正憲(東京都)
- 26 紅葉と満天の星独りじめ水上の宿喜寿の幸せ 岩崎令子(大阪府)
- 27 鎌の月横雲裂きて出でにけり鳥まだ覚めぬ空白む頃 島田實貴男(群馬県)
- 28 秋空をスリーデイマーチウオーキング 武蔵野を90キロも歩く 新井 賢(埼玉県)
- 29 誰がためにいくさの庭にねむれしかいまも偲んで心晴れず 林 玉子(長野県)
- 30 うぐいす目白ひよおながらそれにがびちよう友つれて庭の木立にせいぞろい 森 俊彦(神奈川県)
- 31 久方に顔見て心でびっくりし私も負けじと鏡に語る 佐伯セツ子(香川県)

川柳

- 32 オートファジーお酒は飲みつづけるぞ 原 崇雄(埼玉県)
- 33 ゴシップが好きな電話の幼な友 石原 岳(群馬県)
- 34 頑張らず楽に生きよと言いきかせ 関本 守(新潟県)
- 35 女性議員国に地方に天照す 青木日出男(群馬県)
- 36 背伸びせず等身が生き易い 細川光子(栃木県)
- 37 政治家の舌の二枚はましなほう 橋本世紀男(東京都)
- 38 母の味忘れてしまいう妻の味 長谷川庄二郎(千葉県)
- 39 いくつかの小さな実りわが旅路 守屋高雄(岩手県)
- 40 すらすらと漢字が読める母百歳 大久保アヤ子(東京都)
- 41 叩かれて親の深い愛を知る 小石澤英夫(東京都)
- 42 ボブデイルン無言の風が吹きとおる 近藤富夫(東京都)
- 43 我は古稀師は傘寿の祝いかな 久保寿雄(北海道)
- 44 肌白く七難隠しこの程度 山口千鶴子(東京都)
- 45 告知され前にはだかる深い霧 小山恵美子(大阪府)
- 46 売場には秋物揃うがそと夏日 和崎治人(山口県)
- 47 CTもCDもすつと出てこない 奥那於子(大阪府)
- 48 慎太郎コイケに嵌つてさあ大変 嶋田征次(東京都)
- 49 八十年抱き通した雑魚の意地 久本にい地(岡山県)
- 50 痩せ鶏頭いつきり暮れて山の寺 服部八重子(東京都)
- 51 カタカナの嫁に教える落し蓋 木村洋一(新潟県)
- 52 としかさねよく効く薬孫電話 山崎一嘉(愛媛県)
- 53 話したいたまには医者と一時間 目黒豊光(福島県)
- 54 男にはどれも戦士の貌がある 高柳閑雲(愛知県)
- 55 新橋で喋ると街の声になる 丸山芳夫(東京都)

俳句

- 56 共栄は腹割つてこそ光あり
菅井文男(新潟県)
- 57 断捨離や我が髪のと櫛サラバ
横山小観(新潟県)
- 58 心の憂さ投げ込んである落葉焚
井原毬子(東京都)
- 59 手鏡の柄に秋冷のいたりけり
杉江典子(岩手県)
- 60 象に乗り象からもらう夏の花
松尾らん(東京都)
- 61 旧村の名を持つ銘酒秋祭
津田忠彦(岡山県)
- 62 身をしばるものなかりけり月の夜
竹本美美子(新潟県)
- 63 梅雨迎え色とりどりの傘の列
水落重式(新潟県)
- 64 燈台を静かに包む秋の潮
川口 襄(埼玉県)
- 65 秋鯖や豊後水道まなうらに
小島岳青(新潟県)
- 66 あまたたび日本列島台風禍
宇都木安子(東京都)
- 67 年寄の自覚のなくて敬老日
高崎登喜子(東京都)
- 68 鬼灯に照らされ馬は石化する
白戸麻奈(東京都)
- 69 遠き日を引き寄せて書く賀状かな
大谷 茂(埼玉県)
- 70 桐一葉すうつと過去がわりこみし
佐々木素風(新潟県)
- 71 石椅子に残るぬくもり秋夕焼
渡部美代子(山形県)
- 72 逆境を笑ひにかへて新酒飲む
堅田秀子(東京都)
- 73 朝夕の散歩コースも豊の秋
道給一恵(埼玉県)
- 74 山の湯に旅人ひとり法師蟬
古谷 力(東京都)
- 75 長き夜の芥川賞直木賞
阿部 至(埼玉県)
- 76 蹲踞に影揺らしたる石路の花
杉原明子(静岡県)
- 77 牛追唄流るる牧や馬肥ゆる
井上静夫(栃木県)
- 78 冬めくや黒雲一朶弥彦山
大橋恒次(新潟県)
- 79 仲秋の夕月見上ぐ九段坂
上村元義(神奈川県)
- 80 薬師寺と云ふ名寺跡曼珠沙華
佐野 繁(静岡県)
- 81 長き夜や神話たよりに星を追ひ
田野倉訓郎(東京都)
- 82 雁わたる中の一羽を亡夫と見て
堀木和子(大阪府)
- 83 頑張った長屋更地に十三夜
居原田連星(大阪府)
- 84 陽の匂ひ包まれ届く富有柿
天野輝子(東京都)
- 85 昼食はなだ万弁当紅葉狩り
檜山とり子(東京都)
- 86 大輪の菊の豊かさ老い忘る
内河邦久(東京都)
- 87 上州の風の得意の虎落笛
山崎吉晴(群馬県)
- 88 新蕎麦を打ちし店主の身拵へ
中島光江(埼玉県)
- 89 震災禍巡らす思ひ夕かなかな
有坂馨園(福島県)
- 90 縁側の客は银杏天日干し
三津木俊幸(千葉県)
- 91 稲刈機狭心症になりける
光成高志(千葉県)
- 92 蟋蟀や人の祖先の優しい目
五十嵐睦博(新潟県)
- 93 遷る世の天長明治文化の日
磯部 力(新潟県)
- 94 吊り雲のうごかぬ富士へ島渡る
神 一男(静岡県)
- 95 小春日や洗濯竿にぶら下がる
倉田淑子(東京都)
- 96 敬老日塗り絵描かされ二度童
田中美智子(埼玉県)
- 97 敬老の祝辞の声の大ききけり
松前邦広(千葉県)
- 98 コスモスや寡黙なれども聞き上手
寺内 侖(埼玉県)
- 99 栗笑みて双子三つ子が招きをり
西條公雄(埼玉県)
- 100 爽やかや靴の片へり東向く
阿部幸子(宮城県)
- 101 银杏のおみやげ少し宮掃除
宮宅芳子(岡山県)
- 102 身の程をわきまえ暮し落葉掃く
田中 昶(鳥取県)
- 103 繰返す技も末達や西鶴忌
浦橋渴雪(兵庫県)
- 104 コンサート睡魔を誘ふ虫の夜
清まさし(静岡県)
- 105 自然薯を提げ来る人の声弾む
駒場京子(神奈川県)
- 106 小春日や時代おくれを忘なく
大窪美代子(大阪府)
- 107 身に入むや旅の記念の石一つ
佐野和彦(静岡県)
- 108 ブドウ酒を搾りいささか酔つ払ふ
湯浅芳郎(岡山県)
- 109 絶筆となりし賀状を読み返す
阿部徳夫(宮城県)
- 110 裏小路三味の音色に虫踊り
阿部澄江(宮城県)
- 111 山寺の掃き寄せらるる银杏の実
小澤円梨(静岡県)
- 112 閉づ雨戸兎確かむ十三夜
石尾曠師朗(東京都)
- 113 皇辺の遍く人の残暑かな
近藤薫也(千葉県)
- 114 はたた神母の電話にこぼるる
伊藤久枝(埼玉県)
- 115 秋の虹すでに暮色の街の上
松嶋光秋(東京都)
- 116 うまいよ酒汗だくの初幹事さん
富樫和子(山形県)
- 117 推敲を止めてちろろに聞きほるる
片山茂子(埼玉県)
- 118 秋寒や吾に擦り寄る猫のおり
吉村充治(埼玉県)
- 119 曲がるたびどよめく車内紅葉狩
長峰正晴(千葉県)
- 120 秋寂ぶや小面ふいと狂いたり
邑橋節夫(兵庫県)
- 121 役目終へ七つの海へ落し水
吉里ひとみ(東京都)
- 122 遣り水を怠らずして松展示
藤井春三(埼玉県)
- 123 ドクドクと強き拍動カンナ燃ゆ
黒岩正子(埼玉県)
- 124 スローがいいゆとりの暮し小鳥来る
井田由利子(宮城県)
- 125 鐘の音を背に漢の秋耕す
宮崎敏昭(埼玉県)
- 126 鴨川の水緩やかな古都の秋
田中恵美子(山形県)
- 127 山ひだの霜と落ち葉で秋深し
杉村美保子(岩手県)
- 128 通りゃんせ鳴るまで待てる秋暑かな
大阿久雅子(埼玉県)
- 129 炊きたての新米の味至福なり
青木涼子(埼玉県)
- 130 ひどい雨骨あり労のポップ・デザイン
福岡 悟(東京都)

- 131 此岸より彼岸へ渡舟彼岸花
梶 鴻風(北海道)
- 132 石仏何ひそひそと草の花
川嶋法子(東京都)
- 133 桐下駄を履くこともなく秋終えし
渡邊 清(宮城県)
- 134 長き夜や膝に広がる母の衣
一瀬正子(埼玉県)
- 135 病窓の景を見つくし夏終る
日名子春実(群馬県)
- 136 竹とんぼ夢の枯野をかけめぐる
井上 進(千葉県)
- 137 竹とんぼ葉とび出し菊人形
堀田寿美子(北海道)
- 138 園児等の声に仰天木の実落つ
中田文子(大阪府)
- 139 一千兆瘦せることなし馬肥ゆる
岩村 昇(神奈川県)
- 140 宣伝カー来て山里もクリスマス
佐藤儀雄(北海道)
- 141 少年の目が輝きて木の実落つ
村田吉雄(東京都)
- 142 出稼に出払ふ村の冬隣
重原 昇(新潟県)
- 143 冴ゆる夜や形見の小夜着重ねけり
中村康浩(福岡県)
- 144 干大根吊し寡黙の峡六戸
岩崎政弘(岡山県)
- 145 手刈りの束の稲架かけ作業翁と翁
星 一子(神奈川県)
- 146 身に入むや命引き連る書の掠れ
中野勝子(鹿児島県)
- 147 二燭光ほどの余命や虫集く
椋本望生(大阪府)
- 148 花ぼさつ露ぼさつありて大地の愛
井上氣海(広島県)
- 149 色鳥やささやく遠い北の森
岩田 信(神奈川県)
- 150 蓮根掘る老まだ若き力瘤
村山徳英(埼玉県)
- 151 秋寂ぶや死せば霧散の詩をつくり
今井勝子(新潟県)
- 152 秋出水嘯みつぎ亀の泳ぎある
津布久信雄(東京都)
- 153 飛行機の影重なりて赤とんぼ
若月理依子(新潟県)
- 154 歌碑めぐり八一を探す秋桜寺
中山日出子(大阪府)
- 155 木洩れ日のダイヤモンドに優る秋
池田 岬(埼玉県)
- 156 みちのくの空を剥がせば春の雪
鈴木蝶次(宮城県)
- 157 一年の思いを纏ひ落葉焚き
田野井一夫(栃木県)
- 158 夕焼に金星輝く秋の空
長谷部喜代子(大阪府)
- 159 満ち足りた顔の牛なり豊の秋
佐藤 信(神奈川県)
- 160 子を持たず妻も娶らざいのこずち
山崎鶴恵(鹿児島県)
- 161 露重く白萩伏して兄の逝く
木村 舳(山形県)
- 162 秋の薔薇皇后さまのたんじょう日
中澤寿美(神奈川県)
- 163 大きくさめ泡立草に囲まれる
小林春雪(新潟県)
- 164 紙漉女ひとつの湖を意のままに
喜龍けん(滋賀県)
- 165 百合の香に誘われ読経風とろむ
菅原茂子(宮城県)
- 166 赤あかね指先に止め兄を呼ぶ
石井一枝(埼玉県)
- 167 秋深むや半世紀ぶり旧友に逢ふ
金子範子(高知県)
- 168 野仏に行者礼して箒草
小泉和明(茨城県)
- 169 暁の光を宿し芋の露
本庄準也(埼玉県)
- 170 冬来たる蝶に刻む十字字
油谷博子(兵庫県)
- 171 遊ぶ児も居ない広々刈田かな
鏡たか子(山形県)
- 172 仔犬らの視線を交わす運動会
有田俊一(埼玉県)
- 173 風神も雷神もゐる電の降る
中川義彦(新潟県)
- 174 ひとりだが仕事はかじる落葉の夜
齊藤安弘(神奈川県)
- 175 入相の彼の空遠く谷紅葉
高垣勝代(大阪府)
- 176 膝の子の母は野良猫冬隣
増本和子(大阪府)
- 177 正教会のとほき鐘の音稲架日和
浅野信廣(宮城県)
- 178 秋めくや旅をいざなふ時刻表
本間 進(新潟県)
- 179 でで虫と競ふ毎日一歩二歩
本間ミネ(新潟県)
- 180 打ちつづく黄金の波や豊の秋
柴田恵美子(北海道)
- 181 花芒生けて窓辺に月を待つ
増田公代(東京都)
- 182 木枯しのニュースを耳に服選び
石川郁子(埼玉県)
- 183 抱擁を解くかに開く返り花
山火白沙(岩手県)
- 184 落ち葉掃く若き齡の父母の墓
沖 惇子(大阪府)
- 185 にんげんの次は我輩天下取る
松田重信(埼玉県)
- 186 寝返りを打てば崖下神無月
井原毬子(東京都)
- 187 猫姫様小春日受けてお平らに
津田忠彦(岡山県)
- 188 手を広げ布団がほしい眠りたし
水落重式(新潟県)
- 189 楸廊が眺めて居さう秋の朝
安木沢修風(新潟県)
- 190 跳び降りたこんな崖ならお手のもの
石原 岳(群馬県)
- 191 ねむたうて恥づも有り無し秋うらら
宇都木安子(東京都)
- 192 傷秋の猫にもありぬ石に寝て
高崎登喜子(東京都)
- 193 ああー寝たね石の上にも三年か
関本 守(新潟県)
- 194 秋の日に路肩で何にを思いけり
渡部美代子(山形県)
- 195 四つ足をなげてひと息花野道
堅田秀子(東京都)
- 196 一炊の夢みる猫や秋日和
古谷 力(東京都)



こちらの写真を見て
詠んでいただきました。

(写真提供：中川 肇さん)

- 197 この暑さもう限界よ尻尾巻く
橋本世紀男(東京都)
- 198 石垣で猫も天下の夢を見る
長谷川庄二郎(千葉県)
- 199 寒がり猫五体満足寝てばかり
居原田連星(大阪府)
- 200 遠出して疲れた猫の昼寝かな
山崎吉晴(群馬県)
- 201 炬燵など知る由もなく猫長者
千代田俳徒(東京都)
- 202 邪魔されずしばしまどろむ小春かな
三津木俊幸(千葉県)
- 203 疲れたり手足投げ出す冬日向
神 一男(静岡県)
- 204 若かりし頃の杵柄手稲刈
有田裕子(北海道)
- 205 ヨッコラショとさがしに来るまで待つ
ところか 佐伯セツ子(香川県)
- 206 落ちそうで絶対落ちぬ夢心地
松前邦広(千葉県)
- 207 朝帰りこの体たらく猫の恋
寺内 侑(埼玉県)
- 208 秋うらゝ無邪気な猫の午睡かな
阿部幸子(宮城県)
- 209 つかれたわ静かな所で一ねむり
清まさじ(静岡県)
- 210 プサ猫よお前の目つきが気にかかる
萬濃その子(神奈川県)
- 211 転た寝に程好き日和肘枕
佐野和彦(静岡県)
- 212 自分の風居場所があつたどっこいしょ
濱崎祥子(鹿児島県)
- 213 一日中婚活したがまるでダメ
阿部徳夫(宮城県)
- 214 もう少し待てば獲物がきくと来る
阿部澄江(宮城県)
- 215 こんなところで昼寝「日光の眠り猫」
鈴木岑夫(千葉県)
- 216 吾輩の思いを詠めと猫の言ひ
山田楽山(埼玉県)
- 217 腹くちてニヤンともいえずひと休み
石尾曠師朗(東京都)
- 218 猫火鉢恋しき頃となりました
近藤薫也(千葉県)
- 219 燃え尽きて深き眠りや恋の猫
坪田勝秀(鹿児島県)
- 220 尻尾巻き何を語るや猫の秋
富樫和子(山形県)
- 221 日向ぼこ眠りの精の如き猫
片山茂子(埼玉県)
- 222 昼鼠わしの昼寝の邪魔するな
藤井春三(埼玉県)
- 223 秋の昼肉球ギョツと天下かな
黒岩正子(埼玉県)
- 224 吾輩は眠りこけたり午後のお
井田由利子(宮城県)
- 225 いい湯だな人間様に分かるまい
山口千鶴子(東京都)
- 226 ごろり猫寂光の中秋もやう
古川正栄(千葉県)
- 227 陽明門の猫も抜け出し日向ぼこ
大阿久雅子(埼玉県)
- 228 やつとひとりなれてゆっくり眠ろう
小山恵美子(大阪府)
- 229 ねずみ追ふ夢む昼寝の猫の腕
梶 鴻風(北海道)
- 230 おとととここでストップ昼寝する
和崎治人(山口県)
- 231 崖つづち安心安全気持ちいい
合田浩子(茨城県)
- 232 暑かった夏の名残りの日向ぼこ
田中豊恵(新潟県)
- 233 落ちそうになっても一人ひるねかな
浅海和代(東京都)
- 234 去るものは追ひたきこころ沢桔梗
岩村 昇(神奈川県)
- 235 いざいざを独り離れて日向ぼこ
佐藤儀雄(北海道)
- 236 のら猫の爆睡無防備秋日向
北野耕兵(千葉県)
- 237 猫さえも石の温味で夢の中
鈴木義雄(福島県)
- 238 足が痛いまだお家は遠いの
岩崎政弘(岡山県)
- 239 秋天やばく一人ぼちだよだれか
星 一子(神奈川県)
- 240 佐渡おけさ思わずネコもおどり出す
高橋登志子(新潟県)
- 241 我が輩のパワースポットよつといで
奥那於子(大阪府)
- 242 尾のあれば寂しくないさ暮の秋
有島和子(東京都)
- 243 沖縄忌遺骨の上に猫昼寝
中野勝子(鹿児島県)
- 244 夢の中炭坑節の猫踊り
嶋田征次(東京都)
- 245 帰り花ヒッチハイクもでやせぬ
椋本望生(大阪府)
- 246 小春日や猫はうつらの岩畳
村山徳英(埼玉県)
- 247 石垣にわが世の秋と猫眠る
関原幸子(東京都)
- 248 毛の艶をお日様に見せストレッチ
木村洋一(新潟県)
- 249 振られたのなぐさめよりもほっといて
小林恵子(大阪府)
- 250 崖の上ボクは愉快な夢を見る
日黒豊光(福島県)
- 251 ドラマならここで真相明かすはず
小川 暘(大阪府)
- 252 炎暑日ほら夕涼み気をつかう
五味田幸夫(神奈川県)
- 253 石畳ひとねいりすつこニヤンニヤン
油谷博子(兵庫県)

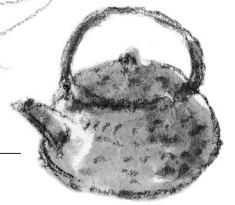
- 254 新米も猫も五キロの重さかな
小山羊子(新潟県)
- 255 猫かぶり寝た振りをして物を捕る
鏡たか子(山形県)
- 256 三毛ちゃあんウフフむにゃむにゃ冬う
らら 杉浦俊雄(静岡県)
- 257 怖い目と艶美な肢体ああいやだ
齊藤安弘(神奈川県)
- 258 至福の日手足のばして夢の中
岩崎令子(大阪府)
- 259 わが輩もメタボはいやしや一、二、三
浅野信廣(宮城県)
- 260 起すなよ今夜もボスと会食よ
菅井文男(新潟県)
- 261 漱石のネコと繋がる長〜い尾
川瀬幸子(千葉県)

●俳句・川柳募集!!



(写真提供：中川 肇さん)

右の写真から、自由にイメージし1文字(俳句か川柳)で表現してください。1枚の写真から想起される世界は無敵大です。応募はアンケートハガキ投稿欄にて。ユニークなイック(2句)をお待ちしております!



10月号の 心に残った作品

※より多くの作品を掲載したいと考え、大賞と、自句自解コーナーは年1回とさせていただきます。

◎川柳部門大賞

6 加齢です老化と言わず気をつかい

石原 岳(群馬県)

・私もお医者さんによく加齢と云われます。老化よりよい云い方だと思います。老化よりよい云い方だと思います。大久保アヤ子(東京都)・自分が老いているのは是認してるが、「ヒザ痛」で先生に「老化」だと云われて少しいやだった。濱崎祥子(鹿児島県)・私も年を重ねるとこう言う事が起つてきますと医者に言われました。小山恵美子(大阪府)・思いあたります。私の主治医は「齢相応です」と。和崎治人(山口県)

丸山芳夫(東京都)

1 ありふれた言葉で味なことを言う
・スゴク、話の内容の内に心に残り、味な言葉をいう人がいる。松尾正一(岩手県)・使いなれた平凡な言葉で味わい深い句を読むことは素晴らしい。久本に地(岡山県)・素直に詠んでいます。木村洋一(新潟県)

19 語らねば忘れが多くなる夫婦

鈴木義雄(福島県)

・同感。守屋高雄(岩手県)・忘れが多くなならない今のうちに。心していききたいことです。目黒豊光(福島県)

◎俳句部門大賞

65 余生にもときめきありて夕涼み

野木宗信(奈良県)

・いつまでもときめきがほしいもの。水落重式(新潟県)・共感できます。老いても心は若くですね。ボケ防止にもなるでしょうね。宮宅芳子(岡山県)・このような気持ちは年を重ねることに大切かと思えます。阿部徳夫(宮城県)・い余生をおくられていますね。岩村昇(神奈川県)・どのようなときなのでしようか。女性は何歳になっても女だそうですね。男性だつてそうではないでしょう。星 一子(神奈川県)・こんな余生すてきです。本間 進(新潟県)・古稀を迎えた私もこの句のようにいつまでもときめきを忘れず生きて行きたいと思つています。沖 惇子(大阪府)

78 父遠し母なほ遠し天の川

佐野和彦(静岡県)

・父、母、今は亡き思い出に浸つて天の川に祈つている様子がよくわかります。私も同じ境遇です。神 一男(静岡県)・ああお父ちゃん、お母ちゃん!! 森 俊彦(神奈川県)・私も両親は他界しその気持ちがよくでています。鈴木義雄(福島県)・年を重ねれば重ねる程、父や母に訊いておきたかったことが多く悔やまれる。有島和子(東京都)・亡き両親を回想しました。五味田幸夫(栃木県)・天の川をみると父・母のことが思われます。本間ミネ(新潟県)

75 二の腕を踊らせて打つ今年蕎麦

小林七重(新潟県)

・二の腕を踊らせてがなるほどと思いました。上手に打てませんが私も蕎麦を打ちます。杉原明子(静岡県)・新鮮な描写。安部 哲(新潟県)・「踊る二

の腕」は見えるようです。力のはいったお蕎麦、おいしいでしょう。奥那于子(大阪府)・躍動感があつて、素朴な味がある。好物の新蕎麦の香りが漂う句。その昔の蕎麦打つ父の姿に重なる。村山徳英(埼玉県)・力が込められている様子は「二の腕を踊らせる」に出ていてよい。石川郁子(埼玉県)

◎短歌部門大賞

162 平和とはかくも難きか飢ゑに臥す子は鼻孔の蠅も追へない

黒澤正行(福島県)

・テレビで観たアフリカの子供たちが浮かんできました。橋本世紀男(東京都)・報道やユニセフの通信で子供達の現状を知り少しは協力しながらも平和を希求する自分の無力さを時にもどかしく思います。堀木和子(大阪府)・何時まで戦うのでしょうか。次世代のため民族の枠を越え話し合いができませんか。日本国内でもむづかしいようですので地球的には無理でしょうかね。菅井文男(新潟県)

182 大漁を魚の悲哀とみすゞ詠む我は美味しと秋刀魚を食らふ

久本に地(岡山県)

・金子みすゞの詩、常に弱者に目を向けた思想、その逆転の行為を詠んだ処川柳的、諧謔性二律背反的なユーモア。津田忠彦(岡山県)・魚の目がこわくて食べられなかった純情な昔もあつたのに。みすゞの感性がほしい。岩崎令子(大阪府)

184 筑波嶺に落ちゆく夕陽蹴りあげて空爆止めてと叫んでみる

合田浩子(茨城県)

・軍国少年だった私も老いて反戦主義に。戦争はただの殺人ごっこ。黒澤正行(福

島県)・神も仏もないのか! 国際連合なんて現代社会では役に立たない。俺だつて蹴り上げたくなる。早坂絃司(北海道)・「空爆止めて」の思いをせいっぱい表現し歌が脈打っている。山田良男(埼玉県)

◎フォトイック大賞



192 歳月が消してしまつた風の彩

松田重信(埼玉県)

・探しに行つたきりなんかわかる様な気がします。伊藤久枝(埼玉県)・落葉を詠む句は多いが風を詠んでいるところ。高柳閑雲(愛知県)

◎他にも

14 流れ星タイミングよくキスされる

小山恵美子(大阪府)

20 オレオレと言わなくなった子の電話

大久保アヤ子(東京都)

37 空蟬や己の骨は拾へない

川口 襄(埼玉県)

99 漬けて煮て焼いて炒めて今日も茄子

吉里ひとみ(東京都)

172 初めての選挙に迷う孫の見るパソコン

ン・スマホの情報多し

186 限られた命を生きた蝸の静かなる眼

に新涼の露 小川 陽(大阪府)

※今後もふるつてご投稿をお願いいたします!

「投稿作品で心に残ったものは?」の問いに、たくさんの回答をお寄せ頂きありがとうございます! その中で特に多くの評価を集めた作品と、それを選んだ理由の一部をご紹介します。

A Q U E S T I O N N A I R E

前回のアンケート

Q.冬の装い、あなたのおしゃれのポイントは？
 ※紙幅の関係上、すべてのお答えを掲載できませんことをお詫び申し上げます。



★マフラー、ストール等

- ・私の場合(ハゲでヤセ)はこれはもうマフラー2つと厚い帽子です
安木沢修風(新潟県)
- ・おおげさに出さぬが首にスカーフを巻く
石原 岳(群馬県)
- ・ブーツとマフラーで寒さ対策
宇都木安子(東京都)
- ・マフラーで素材は毛糸のふわふわした少し幅広のものが好き
青木日出男(群馬県)
- ・着る物の色にあわせたマフラーを選ぶようにして楽しんでいます
堅田秀子(東京都)
- ・目立つスカーフを結びます
杉原明子(静岡県)
- ・一寸高価なマフラーです。ダンディーに見えます
山崎吉晴(群馬県)
- ・絹織のスカーフを使い分けております
有坂馨園(福島県)
- ・スカーフで若さを装う
峯岸信子(東京都)
- ・マフラーに帽子どちらもおニューがいい
佐伯セツ子(香川県)
- ・濃い色の服が好きなので衿元に白・薄紫など淡い色のスカーフを巻く
寒川靖子(香川県)

- ・マフラー。少しでも若く見える様標元に気をつかいます 清まさじ(静岡県)
- ・マフラーはたつぷり広めがいい。明るい色を選びます 濱崎祥子(鹿児島県)
- ・帽子とストール。一年中大好き
富樫和子(山形県)
- ・ネックチーフや小さめのマフラーをよく使用
井田由利子(宮城県)
- ・マフラー(紺色)とセーター
宮崎敏昭(埼玉県)
- ・マフラーのストライプ柄
古川正栄(千葉県)
- ・首元の保温・タートルネックとスカーフ・マフラーにこだわります
大阿久雅子(埼玉県)
- ・マフラーと帽子。雪の中で遭難した時に目立つように 梶 鴻風(北海道)
- ・顔うつりの良いマフラー等
川嶋法子(東京都)
- ・ネックチーフを首に巻くことです。気分によって明暗をかえています
田中豊恵(新潟県)
- ・見た目の暖かそうなマフラーを首に粹に巻く
重原 昇(新潟県)
- ・マフラー。昔の彼女のプレゼント。今も使用
濱田イサオ(福岡県)
- ・マフラー、帽子、手袋毎年購入します
北野耕兵(千葉県)
- ・その日の服装に合わせてるようにして必ずマフラー・スカーフを持ち歩きます
星 一子(神奈川県)
- ・忙しい毎日にメリハリを付けたい時にストールを愛用しています
沖 惇子(大阪府)

- ・首まわりにいつもマフラー・スカーフを。色や柄で変化 奥那於子(大阪府)
- ・洋服の色にシヨールやマフラーを合わせる
有島和子(東京都)
- ・レンガ色の帽子、マフラーでアクセント
小林恵子(大阪府)
- ・気分的にコートにマフラー、ストールを使い分けます
小川陽(大阪府)
- ・帽子マフラー等、コートとの組み合わせ
石井一枝(埼玉県)
- ・ネックウオーマーをしています
金子範子(高知県)
- ・格子柄(タータン)のマフラー。色合いが微妙に違うのを使い分けて
本庄準也(埼玉県)
- ・着なれた毛糸の帽子とマフラーくらいでしょうか
菅井文男(新潟県)
- ・みかん色、むらさきのマフラー
林 玉子(長野県)
- ・ストールの巻き方を工夫する
石川郁子(埼玉県)
- ★色
・年令を感じさせないスタイルで気持をアップすることを心がけ、好きな色をどんどん着る 杉江典子(岩手県)
- ・明るい色で顔のくすみをかばう
高崎登喜子(東京都)
- ・派手な色の綿入れ半纏が八十路半はの老いのおしゃれ 黒澤正行(福島県)
- ・清潔を心して明るい色を身につけます
道給一恵(埼玉県)
- ・黒・紺色が多くなり自然な状態がオシャレかな
内河邦久(東京都)
- ・茶系に統一
吉村充治(埼玉県)

- ・明る目の暖かいピンクやクリーム、オレンジなどに目が行き心くばりしておしゃれをしています
高須 孝(愛知県)
- ・茶系統のブレザー。フランクのスボン
田中 昶(鳥取県)
- ・カラーバランスを考えた適度な重ね着
萬濃その子(神奈川県)
- ・上下の色の取り合せ出来るだけ明るく
大窪美代子(大阪府)
- ・還暦なので赤を上手に着こなしたい
吉里ひとみ(東京都)
- ・春待つ色(薄紫)でさめる
合田浩子(茨城県)
- ・少し派手めに明るく装う
日名子春実(群馬県)
- ・冬は暖色を使います
森 俊彦(神奈川県)
- ・明るい色でおしゃれしてダンス、カラオケと騒いでいる！ 油谷博子(兵庫県)
- ・モノトーンの季節だからせて明るく派手派手ルックで 岩崎令子(大阪府)
- ・きれいな目な色を！
川瀬幸子(千葉県)
- ★帽子
・冬は少し厚めのハンチング等
長谷川庄二郎(千葉県)
- ・帽子素材や色合いをその時々で
天野輝子(東京都)
- ・コートに合った帽子
有田裕子(北海道)
- ・外出には色や形のちがった帽子をいつも被って楽しんでいます
関原幸子(東京都)

QUESTIONNAIRE



・「毛糸の帽子」と「ベスト」が好き

寺内 信(埼玉県)

・「白いつばきの冬帽」でしようか。いかつい小生に似合っているとお世辞がうれしい
鈴木岑夫(千葉県)

・外出は帽子・手袋・ステッキを：
藤井春三(埼玉県)

・お気に入りの帽子でぬくぬくルン♪
大橋絵代(千葉県)

・冬帽子をかぶり朝のウォーキング。夜は手袋も加わり妻も加わり星のシャンドリアの下を歩く楽しみ
村田吉雄(東京都)

・スキー帽子に毛糸のでぶくろ
鈴木義雄(福島県)

・キャップ、ハット、ハンチング。TPOで使い分け
中村康浩(福岡県)

・ハンチング、山高帽など使いわけています
岩田 信(神奈川県)

・赤い帽子
津布久信雄(東京都)

・シャッポ。毛の中折れ帽子
杉浦俊雄(静岡県)

・妻が編んでくれた毛糸の帽子
新井 賢(埼玉県)

★コート
・ハーフコートを羽織り、軽快に防寒に
居原田連星(大阪府)

・『カシミヤのコート』でダンディーに：
阿部徳夫(宮城県)

・TPOに応じた、コートとジャンパー、ジャケットを着こなす
和崎治人(山口県)

・洒落たコートで中味を隠したい
井上 進(千葉県)

・カシミヤの軽くてあたたかなコートでしようか！
中川義彦(新潟県)

★セーター

・水色か紺のセーターとチヨッキが気に入っています
古谷 力(東京都)

・十一月三日文化の日を期して普段着としてタートルネックのセーター「臙脂色」を愛用
上村元義(神奈川県)

・服とセーターの色合い
浅野信廣(宮城県)

★ブーツ、靴

・ブーツの色をカラフルに：
阿部澄江(宮城県)

・ピカピカの靴をはく
黒岩正子(埼玉県)

・寒いですが靴に気を配っています
山崎鶴恵(鹿児島県)

★手袋
・いただきし黒き手袋類に当つ
坪田勝秀(鹿児島県)

・手袋に明るい色を
中田文子(大阪府)

・黒い皮の手袋をして寒さに立ち向う
桑原謙一(群馬県)

★肌着

・老いたればこそ清潔な下着を着たいと思います。冬でも白が好き
大橋恒次(新潟県)

・軽くて暖かい下着や上着を選びかさばらずすっきりとおしゃれしたい
小山恵美子(大阪府)

・薄手の暖かいもの(肌着)、たつぷりとした着心地の上着、らくだ色の襟巻。
老人くさいですね
村山徳英(埼玉県)

★ヘアスタイル

・ひげそりと頭の整髪
神 一男(静岡県)

・コートの衿に合う髪形、首すじの髪を短く軽くして寒いのがまん
中山日出子(大阪府)

★ネクタイ

・ネクタイを利用して首に巻く。アクセントを兼ねた防寒にもなりますので：
三津木俊幸(千葉県)

・ネクタイの柄
椋本望生(大阪府)

★その他
・昔の服を着ていること。今風にアレンジしてなるべく若々しくありたいと願つて！
井原毬子(東京都)

・女房まかせ
原 崇雄(埼玉県)

・粋なブルゾンに鳥打ち帽それにロイド眼鏡
津田忠彦(岡山県)

・コートを着ず上着だけで過すように飾りを見せて
水落重式(新潟県)

・アクティブな感じを心がける
佐々木崇嗣(新潟県)

・小じやれてる
小粋なセンス
小ざつぱり
関本 守(新潟県)

・娘婿のお上り(?)のジーパン、似合うと云われ調子に乗っている
井上静夫(栃木県)

・厚着し過ぎない
細川光子(栃木県)

・着ぶくれに見えないよう薄手で暖いものを重ね着する
堀木和子(大阪府)

・毛皮の襟巻、コートも毛皮。体全体あたたまり寒さしらず、又の流行を望んでいます
大久保アヤ子(東京都)

・清潔感
五十嵐睦博(新潟県)

・スポーツウエア。色彩も多種、軽くて暖かく、活動的な年配者にはこれに勝る物なし
西條公雄(埼玉県)

・冬は寒さでついつい前屈みになりがち。背筋を伸ばして歩くよう心がけています
小林七重(新潟県)

・軽くて暖かい素材の洋服を着たいと思つています
阿部幸子(宮城県)

・古いものも新しい物も色合いを考えて組合せて着る。上着は無地を着る
駒場京子(神奈川県)

・バンダナ(濃紺)
湯浅芳郎(岡山県)

・スポーツテイラーにして体を動かすようにしています
小石澤英夫(東京都)

・軽くて薄く機能性に富んだ物を選びます
久保寿雄(北海道)

・外出時はほとんど和服です。背筋が伸びて気が引き締ります
山口千鶴子(東京都)

・コートのブローチ。冬のコートには必ずブローチをつけます
一瀬正子(埼玉県)

・他人に不快感を与えないものを着る
久本に地(岡山県)

・活動しやすい軽くて暖かい服
井上氣海(広島県)

・軽いフリースを着ます
木村洋一(新潟県)

・今年カーディガンの長目のもの、コートのように着こなすそうです。ます体型が？
池田 岬(埼玉県)

・ダウンジャケットなどを好んで着ています
高柳閑雲(愛知県)

・体を動かしやすくコートは暖かい物、中はうす着で首、手くび、足くび、小物を統一して楽しみます
大鳥居牧子(東京都)

・五本指のビビットな色の靴下
小山羊子(新潟県)

・何歳になっても何を着ても背筋をピンとして歩くようつとめています
山火白沙(岩手県)



10月号へお寄せいただいたお声の一部をご紹介します！
皆様のご感想、はげまし、親身なアドバイスで情報誌「喜怒哀楽」
が作られています。心より感謝申し上げます。

- ・ 菜根譚 人生の師となっています。
- ・ 以前山西さんのエッセイを拝見してから新聞その他でお句や近況を見るたび一度お目にかかりたいものと思っていました。今回の俳句会の様子を読みお逢い出来たような気持ちでうれしいです。
- ・ 笑顔礼讃西東 三木様の生き方、作句姿勢に共感しました。七十二歳からの学び直し出来るんですね。
- ・ 毎回楽しみにしてる「心に残った作品」は、さすがですネ！大賞おめでとうございます。
- ・ 味覚の秋のアンケート。人それぞれに食べたいもの、好物おもしろいです。
- ・ 新潟ぶらり。群馬に吉野秀雄顕彰短歌大会というのがありますが、秀雄がハ一のただ一人の門弟であったとは知りませんでした。
- ・ にいがた文化の記憶館便り(10) どこにも書かれていない作家の顔が見えて良かったです。
- ・ 岩田桂さんの「青蜜柑が目にしみる」運動会=青蜜柑であった。エッセイを読みながら「そうそう！」と何度も頷いてしまった。
- ・ 「そこに炎の馬がいる」を読み、小説の入り口に立ったような高揚感を持った。人々の異なる現実を可視化する…。つまり創作化可能ですよね。
- ・ 編集後記の七行に感動した。人は皆同じではない。一人ひとりを尊重すべきだ。
- ・ 竹トンボは平賀源内が発明したんだあ。へえ～
- ・ 「あなたという物語を一冊に残す」人間だけが出来る物語を記すことの素晴らしさ。
- ・ 創立十三年おめでとうございます、竹とんぼから編集後記まで味読、「あなたという物語…」再読三読。木戸製本所からの独立、母上の遺稿集「忘れな草」それが第一号。体験に裏づけられて説得力があります。「これからの夢」がすばらしい。ご奮闘を祈ります。

※今号へのお声も、ぜひお寄せください！

新潟ぶらり

★県立鳥屋野潟公園―市街地の白鳥



寝静まった夜に白鳥の声が聞こえてくる。ああ、もう冬がやってくるんだなあと感じる――。

新潟で白鳥といえば瓢湖(阿賀野市)が有名だが、新潟市にも多く集まる。日本に渡ってくるコハクチョウとオオハクチョウのうち、コハクチョウの越冬数が全国一。その数は一百万羽を超えることもあるという。十月初めに飛来しはじめ、十一月下旬にピークを迎える。

白鳥は昼間田んぼで落穂などを食べ、夜は潟などの水辺で休む。この「田んぼと水辺」という環境が白鳥にとって快適で、さらに新潟が雪と雨の多いことが重要だという。というのも、白鳥のこはんの食べかたは、田んぼで落穂と泥水を一緒に吸い、泥水だけを出すと



新潟市中央区鐘木 451

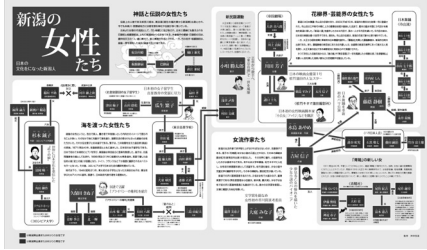
いうもの。田んぼが雪や雨で湿っていることが、餌の食べやすさにつながっているのだ。

白鳥が多く集まる佐潟(西区)や福島潟(北区)は新潟市郊外だが、鳥屋野潟は市の中心にあり、新潟駅南口からは車で十分ほど。ここに、白鳥が四千羽も飛来する。市街地でこんなに大きな野鳥を観察できることは、めずらしいのだそう。鳥屋野潟近くには、新潟県立鳥屋野潟公園があり、「女池地区」と「鐘木地区」の二つのエリアに分けられている。「鐘木地区」には鳥観庵という野鳥観察舎が設けられている。眺めがいい。

平成二十六年に「新潟市の鳥総選挙」という市民投票が行われ、新潟市の鳥として制定されたのが白鳥だった。市民にとって、身近な生きものである。二月いっぱいまで、厳しい冬を、一緒にすごす。

(菅真理子)

▶ 相関図



新潟の女性たち

秋岡 啓子

江戸時代、豊かな資源を持つ越後は13の藩に分けられ、分割統治されました。明治に入ると広大な一つの県となり、明治27年ごろまで日本一の人口を誇った新潟県は、新しい世に有為な人材を多く輩出しました。

にいがた文化の記憶館では、近現代日本の文化に寄与した新潟人が、どのような人間関係の中で活躍したのか一目で分かるような相関図を、「医学」「文学」「美術」などの分野に分けて常設展示しています。今回はその中の一つ、「新潟の女性たち」について紹介します。

「新潟の女性」といえば、「色白の美人」とか、「働き者で忍耐強い」とか内向きのイメージで語られることが多いようです。しかし時代を先駆けて世界に進出し、精力的に活躍した新潟の女性たちがいます。

1871(明治4)年、岩倉使節団に加わって渡米した日本初の女子留学生5人のうちの一人、瓜生繁子は佐渡奉行役人の娘です。繁子自身は江戸生まれですが、実兄の益田孝は佐渡出身で、後に三井財閥を支えた大実業家です。繁子はアメリカで津田梅子、大山捨松らと学び、帰国後は東京音楽学校(現東京藝大)で教師となつて幸田延(幸田露伴の妹)らを教えました。

官費留学生の繁子と違い、1898(明治31)年、結婚のため私費で単身渡米したのが、長岡藩筆頭家老・稲

垣家の六女として生まれた杉本鉞子です。父の平助は戊辰戦争の際、武装中立派の河井継之助と対立した人物でした。鉞子は幼少期から武士の娘として厳しい教育を受けて育った生い立ちや、アメリカでの生活を半自伝的小説『A Daughter of the Samurai(武士の娘)』として英語で書き、世界的ベストセラー(7カ国語に翻訳)になりました。夫に先立たれた鉞子は、文筆で身を立て、2人の娘をアメリカで育てました。また名門コロンビア大学で日本語と日本文化史を講義しましたが(1920~1927年)、それから約15年後に同大学で日本文学を学んだのがドナルド・キーン氏(柏崎市名誉市民)です。

港町・新潟は江戸時代から花街が発展してきました。日本舞踊「市山流」の宗家があり、今でもその伝統を継承しています。5代目家元の妹・川田芳子は上京し、川上貞奴の内弟子になりました。日本映画の草創期に松竹の女優として絶大な人気を誇りました。同じ時期、松竹蒲田撮影所で女性初の映画脚本家として活躍していたのが、南魚沼市出身の水島あやめです。ついでに言えば、あやめが少女時代に憧れていた作家の吉屋信子は新潟市生まれです。

相関図の面白いところは、このように複数の人物が線で繋がることによって、新たな発見が生まれることです。偉人も一人で偉業を成し遂げたわけではないと分かります。当館では6分野の相関図(医学、文学、美術、中国学、女性たち、反骨の系譜)を冊子にして販売もしていますので、気になる方はぜひ文化の記憶館までお問い合わせください(税込600円です)。



▲吉屋信子



▲杉本鉞子



▲瓜生繁子

【展覧会情報】

企画展示「～絵と写真でつづる～ 新潟ノスタルジア」

- 会期：12月9日(金)～2017年1月29日(日)
- 休館日：月曜日(1/9は開館)、
12/28(水)～1/3(火)、1/10(火)

「食楽句楽のすすめ」の執筆者・岩田さんは、岐阜県生まれ、新潟市在住の元大手企業の企画マン。畑を耕し、俳句の主宰をつとめ「食楽句楽」を実践しつつ人生のセカンドステージを満喫されています。食と俳句とのコラボレーション、当意即妙のエッセイをご賞味ください。

「わああーい」すき焼きだ

岩田 桂

子供のころ、すき焼き(冬の季語)といえ、それこそ月に一度くらいハレの食べ物でした。だから「今日はすき焼きだよ」と言う母親の声を聞くともう、うれしくてうれしくて、鋤焼踊りしたものです。阿波踊りをちよつとまねて、ヨイヨイヨイと手をあげてブラブラさせるのです。

そして「今日は、すき焼きだ、わああーい、わああー」と世間にふれまわりたくなるような、そんな緊張感がありました。でもどうして緊張しなければならぬの、という素朴な疑問が湧いてきます。それは後でときほぐすことにして……。

ボクの五人兄弟はそれを「すき焼きの日」と名付けていました。昭和のごちそうといえ、やはりすき焼きが一番でした。肉が貴重な時代だから、庶民の口にはなかなか入らない。

しかも「すき焼き」が特別なのは肉自体の貴重さに加え、家族で食卓をかこんで、お父さんの買った高価な肉をワイワイ食べるという、イベント性ゆえだったのでしょうか。

すき焼きの卓袱台開く大家族

鋤焼奉行はもちろんお父さんです。息を潜めて見守る家族の緊張した視線を感じながら、お父さんは、家長の威厳を保ちつつ、作業をします。

作業の経過は、おおかた次のようです。

1、牛肉は二〜三分に切る。ねぎは一センチ幅の斜め切り、しらたきは下ゆでし食べやすい長さに切る。

2、焼き豆腐は十等分くらいに切る。しいたけは飾り切り、白菜はざく切り、春菊は五センチ

くらいの長さに切る。

3、すき焼き鍋を熱し、牛脂をとかして鍋全体になじませる。

4、ねぎを焼いて香りを出し、牛肉の両面をさつと焼く。

5、肉に適度に焼き色がついたところで、砂糖と醤油をまわしかける。

6、鍋を弱火にして、しらたき、焼き豆腐、しいたけ、白菜、春菊を入れ、味がしみ込むように時々焼き豆腐の上下を返し、全体に色づくまで煮る。

まあ、こんな感じの光景です。

さていよいよ鋤焼鍋を攻め立てる瞬間がきます。「もういぞ、熱いから気をつけて食べよ」と父さんのゴーがかかります。

満を持した緊張感が解けると、誰もが肉をめがけて突入していきます。野菜や焼き豆腐は後回しで、必死に肉を追いかけてます。追いかける肉は、野菜に身を隠しながらその時期を待つ覚悟がみうけられます。

「お兄ちゃん、それはボクの肉だから、盗らないで」と末っ子がわめき出します。妹は自分の陣地を鍋の片隅に設けて、獲物を囲んでいます。「私が育てている肉だから、食べちゃあいやよ」と、箸で陣地を淵に寄せています。

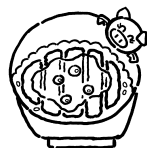
それを笑いながら父と母が見守ります。

鋤焼や七人の敵すでになく

先発の材料半分くらいが鍋から消えて空になると、中継ぎの残りに材料を入れ、さらに砂糖と醤油を継ぎ足します。この不断連続性が実にうれしい。

具を食べ終えると、最後の抑えとしてうどんや切り餅を入れます。これが又たまらなくおいしい。すき焼きの合体うま味を、余すことなく沁み込ませた仕上げの馳走だからです。

鋤焼は「先発→中継ぎ→抑え」のフルストーリーから成り立つところが実にすばらしい。そのストー



リーを満喫する光景こそ、家族の在り様と幸せそのものではないのか。家族にとっては「昭和」はやはり幸せな時代だったのかもしれない。そんな家族の姿を作ってくれた父母はもういない。

鋤焼の父の座今も空けしまま

そういえば昭和の名曲「上を向いて歩こう」のアメリカ版タイトルが「SUKIYAKI」であるのも興味深い。何かを指して、上を指す時代はずでに終わってしまったけれど「寂しいけれども涙をこぼさないように、前をむいて歩いて行こう」と坂本九さんは歌ってくれました。どちらも「昭和」を象徴している気がします。

すき焼きの思い出といえば、もうひとつ忘れられないのが、京都寺町三条に位置する三嶋亭です。「まずはお食べやす」と霜降りの和牛(丹波牛、近江牛)を、牛脂が溶けた鍋に並べて軽く焼き、砂糖と醤油をかけて仲居さんが食べさせてくれます。

しかも仲居さんが「あーん、口あけて」などと食べさせてくれればその気になるのですが、現実はその間に甘くはない。

まあ上等の肉だからこそできる食べ方です。この甘辛の焼肉の旨いことと言ったら、もうたまりません。このまま死んでもいいくらいの絶品です。

鋤焼だから焼くのは当たり前ですが、関西の鋤焼は割り下を入れません。砂糖と醤油、たまにみりんを回しかけて、煮込むのが流儀です。

だから割り下を入れる関東風は「牛鍋」と区別して、鋤焼とは格下に扱います。牛の名産地(神戸牛、丹波牛、近江牛、松坂牛など)を抱える関西ならではのプライドなのでしょう。

今は、嫁いだ娘が来るとすき焼き、孫が遊びに来るとすき焼き……と、年がら年中すき焼きを食べていますが、すき焼きに対する思いは、昔とまったく変わっていません。しかし鋤焼踊りしたあの頃の少年は、もう古希をとうに過ぎました。

鋤焼や古希も昔の声をだし

みんなのエッセイ わたしの母 原稿を募集!



現在、お客様の合同の本としては俳句・短歌・川柳の「ご縁ブック」があり、今年で13冊目となりました(年1回発行)。新しいシリーズとして、短詩を詠まない方にもご参加いただけるよう「みんなのエッセイ」を制作します。毎回テーマを決めて募集し、皆さまのエッセイを1冊の本としてお届けいたします。初回のテーマは「わたしの母」。

来年の母の日に、ご自身のエッセイが掲載された本をお母様にプレゼントしてみたいはいかがでしょうか。
※詳細は同封のチラシをご参照ください。

「喜怒哀楽」をご紹介します

来年から「喜怒哀楽」継続の更新時期となりました。更新のご案内が同封されている方は、ぜひ継続をお願いいたします。継続特典もあります!

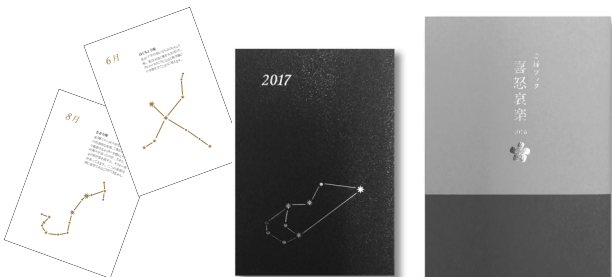
また「こんな読み物があるよ」ということで、お近くのお知り合いに「喜怒哀楽」をご紹介します方には、何部かお送りいたします。お気軽にお問合せください。



「2017年手帖」お送りいたしました 「ご縁ブック2016」12月中旬に発送いたします

お手元に届いていないという方は、お手数ですがご連絡ください。

「2017年手帖」「ご縁ブック2016」とも、若干数あります。お早めにお問合せください。



一筆箋とポストカードブック 最後のご案内

今回が13周年特別価格(1,300円)での最後のご案内となります(以降2,000円)。プレゼントとしてもとても喜ばれています。ぜひ、この機会にお買い求めください。

なお、新潟県内では北書店(新潟市中央区)、英進堂(新潟市秋葉区)、いわむらや/ギャラリー野衣(いずれも新潟市西蒲区)でも購入可能です。



Q. 冬の装い、あなたのおしゃれのポイントは?

※ みんなでコマを持っています。コマを回したことがないというスタッフもいました。

木戸 敦子



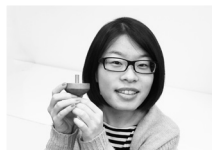
その昔、3番目の兄とセーターから下着まで4、5枚を一挙に何枚脱ぎ着できるか競っていた。その名残りが基本は着脱簡便で首、手首、足首、○首を暖かくするオシャレより現実派。

古川 久美子



とにかく厚着が苦手で、冬でも比較的薄着。コートを羽織ればなんとかなると思っている。お洒落ポイントなんて皆無。あったかくなる肌着は着たら負けだと思っている。最悪、ノースリーブの上にコートを羽織っただけ、とかもある。変質者か。

菅 真理子



靴下は黒ばかりでしたが、おしゃれなスタッフを見做って、何かしら色のあるものを探すようになりました。不思議と少し暖かいような気がします。

木伏 美恵



最近は明るい色を着るようになりました。特に「あか」が好きです。靴下は夫婦そろってあか色。洗濯物を干すとあかばかりです。

上村 真智子



朝、たくさん服を着ている時間がないのとニットはチクチクするのでほとんど着ない薄着派。まだお年頃なのか、寒さをあまり感じないので、お出掛けの時は、短めのコートに長めのブーツ着用。

金子 ゆり子



風邪をひかないよう第1番に温かく。そして新潟の冬は雪が降るので、白い雪に映えるように、これからは明るい色を多く着るようになりたいと思っています。

石山 由希子



憧れはミトン(手袋)。子どもの頃買ってもらいましたが、手の自由がきかず結局最初だけ。現在は手袋はしません。車に積もった雪をはらうのにゴム手袋(内側ボア♥)が必需品です。

吉田 瞳



とにかくモフモフとかフカフカとかそういう類いのもの、ファーが大好き!冬になると巻いたり着たりして暖かさ癒されポイントで身につけています。工場の方に「今年もまたぎの季節だね」なんて言われた事も(笑)

山田 千秋



冬は雪に悩まされる新潟です。やはり防水性では長靴が一番なのですが、前はいかに長靴という感じのものしかありませんでした。しかし近年、見た目はブーツでおしゃれなのに長靴が販売されました。それ履いています。



果報は寝て待党

雪舟えま

これを書いているいまは11月1日で、アメリカ大統領選挙の一週間まえである。ウィキペディアでなんとなく今回の大統領選挙について見ていたら、「栄養党」を掲げたレストラン経営者という泡沫候補があつてほえましかつた。私が政党を立ち上げるとしたら「買い食い党」「散歩党」「若白髪党」「果報は寝て待党」あたりか。いちばん濃厚なのは「果報は寝て待党」だろうなと空想した。

私は成人としてはよく寝るほうで、直近一か月の睡眠時間を平均すると一日十二時間くらい寝ていると思う。

睡眠はピユアな快楽で、心も解放されて素晴らしい体験だが、夢を見るのも大きな楽しみのひとつ。夢の中で東京に似た街に時どき行くのだけど、行こうと思つて行けるわけではなく、行けたらラッキー。私はそこを「もうひとつの日本」と呼んでいる。

もうひとつの日本では、こつちと同じようにひらがな・カタカナ・漢字などを使っているが、それらが奇妙な混ざりかたをしていて読めない。看板や店名など、あれなら読めそうだと思つて近づくと、「も」の横棒が一本足りなかったり、形が微妙にちがう文字もある。街には「て釣むる」「や名ヨん」などの単語があふれる。

もうひとつの日本でお菓子をもらい、パッケージ裏の原料名を見ると「犬用」と、謎のスペース（空白）のある文字が書いてあつて、鳥肌が立った。犬用のお菓子をくれたのかよ……！と、ちよつとホラーだったが、

早くも雪舟えまさんの最終回。今回も独特な世界観で夢の中のエピソードを魅せてくれます。次回からの21人目の詠み人は、富山県氷見市在住の自由律俳句の男性俳人。雪舟さんいわく「読んでいる時間の長さが揺らいで感じられるような、艶とミラクルのある言葉を綴られます」。ご期待ください！

「犬」「用」という字は向こうの日本ではちがう意味なのかもしれない。ちなみに向こうの新幹線はロケットっぽくて、車内が狭くて乗客はヘルメットをかぶつて乗車しています。

一日八時間睡眠だとしたら、一日の三分の一を活動休止していることになる、それはすなわち人生の時間の三分の一を無駄にすることなのだ、みたいな言説をむかし見かけた（いまもいふのかな）。青年期の私はそれをわりと素直に信じてしまつて、自分は人生の三分の一どころか半分無駄にしているな、と罪悪感もあった。しかし、二、三十代と緊張しやすい性格で、四六時中なかに追い立てられているような焦りを感じながら生き、自宅にいるときもリラックスがうまくできなかつた自分には、眠りというのはほんとうに、ゆいゆい、現実の気がかりからすべて解放された貴重なひとときだった。それに気づいてから積極的に眠りを楽しむようになった。

先日、寝ても寝ても眠い、過眠体質の経験を生かして（？）他人のために眠る「睡眠士」という職業の主人公が出てくる小説を書いた。過眠体質の人の小説は七年まえにも書いていて、過眠の主人公が夫と助けあつて生きていこうと自分の居場所を再確認するというストーリーだった。いまの私が過眠の人物を描くと、人一倍眠れることを専門職にしてしまうのだからとおどろいた。ちよつとこのエッセイを皆さんがご覧になるころに発売中の、『小説新潮』十二月号に掲載されているので、ぜひお読みください！

●プロフィール

1974年 北海道札幌市生まれ。著書に歌集『たんぼるぼる』、小説『タラチネ・ドリーム・マイン』、『幸せになりやがれ』ほか。12月に短篇集『恋シタイヨウ系』（中央公論新社）、『凍土二人行黒スープ付き』（筑摩書房）が発売予定。

2016. 11-12. vol.89 (2016年12月10日発行/隔月発行)
 ●発行・印刷/株式会社ミュージズ・コーポレーション
 〒950-0801 新潟市東区津島屋7-29
 TEL 025-250-9555 FAX 025-250-9550
 ☎ 0120-819-395
 e-mail odp@eseihon.com / HP http://www.eseihon.com
 郵便局口座番号 00530-4-81370 口座名 株式会社ミュージズ・コーポレーション

編集後記

「顔も性格もコピーみたいね」と言われていた86歳の父が転び、父の日常の歯車は大幅に狂い表情が消えた。余計なことは言わない人だから「痛い」以外、誰にも何も言わない。コピーの私にも。母が亡くなって15年。月に一度は行きつけの店と一緒に飲みに行っていたが外に出たくないし、飲みたくもないという。悲しいがどうすることもできない。お互い優しい言葉もかけられない質だが、極力顔を見に、見せに行こう。こんな顔でも待っている人がいる限り。忙しい年の瀬、今年お世話になった方の顔を思い浮かべてみる。本年のご愛顧に感謝いたします。ありがとうございました。(木戸敦子)